

電力王・福澤桃介

軽薄な私が如何にして成功者となりしか

江上 剛

第五回

第五章 失意の時

1

人生は思うに任せぬものである。自分の人生を自分の思い通りにできると思う人もいるようだが、それは思い上がりも甚だしい。

撰関政治せつかんで天皇をも超える権力を握っていた藤原道長ふじわらのみちながが、「この

世をば我が世とぞ思ふ望月の欠けたることもなしと思へば」と和歌を詠んだよ。この世を自分の思い通りにできるとの傲慢ごうまんさが表れた和歌と言われるが、果たして道長は思い通りの人生を歩むことができたのだろうか。

私は、人生とはいいい時より悪い時の方が多いと思う。苦難の時の方が長いと言ってもいいだろう。

しかしそんな苦難の時期を如何いかに過ごすかが問題なのだ。ただ漫

然と不平不満を漏らし、他人にたかり、頼り過ぎたのでは、その人の価値は上がらない。

苦難の時を、前向きに、恐れず歩くことによってその後の人生が輝くのだと思う。

私は、北海道炭礦鉄道たんこうで働いていた。初めての会社勤務であり、真面目に熱意を持って働いていたのだが、そのうち上司から指示をされるばかりでさほど愉快ではなくなってきた。アメリカでの鉄道会社勤務の経験を生かそうと焦って、社長に建言したこともあったが、ことごとく無視されたため、やる気も失せ始めた。こんな時は、仕事をしている振りをするに限ると、心に決め、ばかばかしいが無駄な書類作りなどに時間を潰していた。

そうやって鬱屈さだやつしていると、貞奴さだやつのことを思い出し出してしまう。本音を言うと、運命の女と思いつめた彼女には会いたいが、所詮、花柳界に身を置く女性である。若い私と縁がつながるはずはない。

しかし、頼みもしないのに貞奴の情報は入ってくる。おせっかいな塾の友人たちからだ。

彼女は、私がアメリカに旅立った頃、政界の大立者おおだてものである伊藤いとう博文公ひろぶみに水揚げされ、その後援を受け、奴と名乗り、正式に花柳界デビューを果たしたらしい。

名前を小奴から貞奴に改め、葭町一の人気芸者になっていた。ところが何を思ったのか、役者川上音二郎と結婚し、花柳界を離れてしまったのだ。

音二郎は、毛氈敷もうせんきに座り、散切り頭に白鉢巻き、陣羽織に日の丸軍扇で拍子をとりながら、

「米価高騰の今日に、細民困窮見返らず、目深まぶかにかぶった高帽子、金の指輪に金時計、権門貴顕に膝を曲げ、芸者太鼓に金を蒔き、内には米を蔵に積み、同胞兄弟見殺しか……」

などと政治批判を歌い上げ、最後に、

「オッペケペ。オッペケペッポー。ペッポッポー」

と意味不明な言葉で囃はやし立てる。

この「オッペケペー節」が一世を風靡ふうびした。今は、仲間を募り壮士芝居と銘打って、「板垣君遭難実記」などを演じている。これがまた評判を呼んでいるらしい。今では歌舞伎の向こうを張って、中村座などで公演を打つようになっていく。

壮士芝居など、何が面白いのかと思うのだが、貞奴は音二郎にぞっこんとなった。貞奴は、売れっ子芸者として旦那も愛人もいたのだが、音二郎に入れあげ、ついに結婚に踏み切り、花柳界から足を洗ってしまった。

この情報に接したときには、さすがに驚いた。運命の女が遠く

に行ってしまったと思い、寂しさを覚えるのは確かだ。音二郎を男にする、と啖呵たんかを切ったという。勝気な貞奴らしい。

仕事へのやる気をなくし、暇にしていると、貞奴のことなど東京の噂ばかり気になってくる。なにも考えずに打ち込めるものはないのか。

私は、鬱々うつづもんもん悶々とした思いを抱きながら暮らしていた。私が憂鬱な顔をしていると、ふさも同じになった。初めての出産に不安が募ってきたのだ。義母のきんから、ふさを東京の実家に戻すようにとの催促が私宛にも頻繁に届いていた。

「ねえ、あなた」

夕食の場で、ふさが言う。表情が心なしか沈んでいる。

「どうした、ふさ。何か相談事か？」

「お母様がね。実家まことで出産するようにと強くおっしゃるの。初めてのことだから経験豊富な母親がそばにいる方がいいと……」

ふさは言葉を濁にごしながら言いにくそうに話す。

「私にも同じことをおっしゃっている。でも札幌と東京は離れているからね。帰るといっても簡単ではない」私は少し考えるような仕草をしてみせた。「しかし、お前が、その方がいいというなら実家で出産するか」

私の言葉に、ふさは嬉しさと不安がないまぜになったような顔を

した。

「そうになると、あなたが一人で札幌に残ることになるでしょう？」

「ああ、それもいいさ。仕事は順調だし、友達もできたからね」

私は無理に明るく言った。

「心配だわ」

「どうにでもなるさ」私はにやりとして、「浮気でも心配しているのかい？」と聞くと、ふさは顔を真っ赤にして、「馬鹿……。そんなこと心配しているわけがないでしょう」と言った。

「ははは」

私は声に出して笑った。

「何がおかしいのですか？」

ふさが怒った。

「私の浮気を心配するなんて、お前も立派な妻になったなって思ったのさ。福澤先生は、きん様一筋だからね」

「もう、からかわないでください」

ふさがすねた態度を見せた。それが、とてもいじらしく見えた。なんとしても私の子供を無事に生んでほしいと思った。

ふさは、この時、すでに実家で出産することを決めていたのだろうと思う。

一方、私は堀社長に呼ばれ、東京支社を開設するので、異動する

よう命じられた。明治二十三年（一八九〇）の十月下旬のことだった。北海道の経済だけに依存していても石炭の需要が盛り上がりがない。東京での販売と、英語力を生かして輸出に努力してほしいとのことだった。

肩書は「買炭係支配人」である。

2

ふさは実家に帰り、すっかり妻から娘に戻ってしまった。

福澤家の敷地内に二人で住むことになったのだが、何かにつけてきん様が顔を出した。ふさは、きん様に甘え、家事などは女中に任せっぱなしになった。

札幌では、他に頼る人がいなかったためか、私にべったりと言ってもいいほどだった。女中が一人いても、私をかいがいしく世話したものだだったが、実家では、妻から娘に戻ってしまった。

これは私の予想通りだった。実家で出産することを決めた時から、ふさがそうなることはわかっていた。

東京支店への異動は、ふさが実家に帰ることになり、福澤先生が私を東京へ戻すよう堀社長に要請したというのが、真相だろう。

私は、まさしく養子になってしまった。福澤家の敷地に住まい

を与えられた居候いそうろうである。プライドが傷つけられる毎日となった。家にいてもあまり楽しくない。私は割り切ることにした。ふさの面倒はさん様に任せればいい。私は仕事に邁進まいしんしようとした。

明治二十四年（一八九一）ふさは無事に出産し、男児が誕生した。駒吉こまきちと名付けた。

さん様も福澤先生も駒吉誕生に大喜びとなり、ますます私たちの家庭に干渉してきた。そしてふさばかりではなく駒吉の世話も二人が買って出るようになった。

私は、家庭内で居場所が無くなった。その分、仕事に傾注した。朝早くから出社し、暗くなるまで取引先を巡った。夜は慶應義塾けいおうぎじゆくの交友クラブである交詢社こうじゆんしゃに顔を出し、人脈作りに精を出した。

仕事は愉快だった。支店長は私に国内外の石炭販売を一手に任せてくれたからである。

仕事というものは責任を持たされ、任されれば愉快であると実感した。今度は、仕事をしている振りではなく正真正銘、仕事をしているのだ。

人に仕事をさせようと思えば、信頼して任せるに限るということではないだろうか。うるさく指示したり、小言を言ったりしても成果は上がらない。ともかく部下には楽しく仕事をさせることだ。

職場の環境も私に有利になった。堀基もとじが社長を退き、その後を

引き継いだ高島嘉右衛門もすぐに退任した。不況で業績が上がらなかつたからだ。そして西村捨三が社長に就任したが、私が期待したのは専務の井上角五郎である。

井上は、塾の先輩であり、私を高く評価してくれた。そのため買炭係支配人という立場を超えて、実質的には東京支店全体の支配人として振る舞うことができた。

井上専務から直接指示を受け、石炭用船舶の手に動いたり、小樽、札幌に文字通りトンボ帰りの出張を繰り返した。

明治二十五年（一八九二）には第二子、辰三が誕生した。家庭は賑やかになり、ふさは子育て、私は仕事と充実した毎日が続いていた。

だが、好事魔多し。好調な時ほど注意しなければならぬのだが、私は自分の身体を過信していた。横浜埠頭での用船の受け渡し式に出席したのだが、その船上で喀血してしまったのだ。結核である。不治の病である。多くの人がこの病で死を賜っている。治すには療養しかない。私は仕事から離れ、福澤先生の肝いりで北里柴三郎によって開設された養生所に入ったが、一向に回復しないため大磯海岸に転地療養することになった。

終わった、と私は思った。しかし、ここで終わってはいけないうもすぐに思い直した。

私の心配はズバリ「金」だった。

養生所の入院費は一日一円七十銭も要する。月にざっと五十円にもなる計算である。高等文官試験に合格した上級国家公務員の初任給と同程度の金額だ。

結核という病は、いつ治るともわからない。そのうえ、命を落とすこともある。私も例外ではないかもしれない。

月五十円もの費用が、この先、何年も負担になる。福澤先生は費用のことは心配するなおっしやってくださる。

しかしこれ以上、福澤先生の世話になるなど、あまりにも情けないではないか。かねてからの希望であったアメリカ留学を実現させてもらい、これからようやく恩返しができると思った矢先でもある。

当面は、いささかの貯えもあり、福澤先生に面倒を見てもらわなくともいいのだが、このまま働くことができず、収入のない状態で暮らすというのはどうであろうか。

ふさとの間には二人の子供をもうけた。彼らを自分の力で養わねばならない。もし私が死んだら彼らはどうするのか。彼らが困らな

いだけの財産を残してやらないといけない。それが親の責任である。しかしそれさえ果たせないかもしれない。

いずれにしても福澤先生にこれ以上、甘えるわけにはいかない。それが私の覚悟である。

私は、川越の水呑み百姓の生まれであると自称している。嫌味に聞こえる自虐的じぎやくな言い方ではあるが、決して卑下ひげしているわけではない。自分を奮ふるい立たせるために言っている面もあるのだ。

この気持ちは幼い頃に芽生え、私の心に根付いた。あの頃、私の家は貧しく、着物は着たきり雀すずめの譬たとえ通りだった。上等な絹の着物を着ている裕福な家の友達ともだちの隣で、木綿の粗末な色の着物を着て並ぶのは、情けなかった。いずれは逆転するのだと誓いを立てた。この貧しさが「金」に執着させるのだろう。

ある友人は、私が結核になったと聞き、「人間は病気の時と健康の時と、この二つの境遇に処する態度をあらかじめ考えておかねばならない」と親切ぶって言ってくれた。

さらに「桃介ももすけが実業人として大成するには、浪人生活、闘病生活、投獄生活を経験する必要がある。今回の病で、浪人と闘病の二つを一気に経験できるんだ。羨うらやましいよ」とも付け加えた。

彼は、励ますつもりで言ってくれたのだろうが、励ましにはなっていない。いったいどれだけの成功者があらかじめ病気になること

を想定しているだろうか。また、長引く闘病生活や浪人生活、投獄生活に疲れ果て、絶望し、人生を諦めた人がどれだけ多いことか。友人から見れば、福澤家の養子となったまでが私の人生の山で、早くも下り始めた、否、がけつぷちに立たされていると思っっているのだろう。

ざまあみろと悪意を持っているとは思いたくないが、人間は嫉妬しつと深い動物である。彼の心の内までは分からない。

ところで人は、誰でも富貴になることを求めるものだろうか。

中国に黄梁一炊の夢という話がある。

邯鄲かんたんのある青年が、田舎家で主人が黄梁（粟の一種）を炊いているそばで休んでいた老人に自分のみすぼらしい身なりを見せながら、我が身の不運を嘆いた。

老人は、彼にどんな人生だったらいのかと聞いた。

彼は「男である以上、功名を立て、末は大将か大臣になり、贅沢ぜいたくをし、家門も繁栄させるような人生が望みだ」と答えた。

彼は、急に眠くなった。老人から渡された陶器の枕をして眠りについた。すると彼はどういうわけか美人の妻を持ち、贅沢な暮らしをし、官僚となり、権勢をふるっていた。しかし仲間や同僚に何度も裏切られ、自殺さえ考えるほど追い詰められる。彼は、どうしてこんなに偉くなってしまったのかと嘆く。なんとか死ぬこともな

く、彼は老境に入り、妻に見守られながら死んでいく。

その時、目が覚めた。彼は、老人の傍にいた。何もかも眠りにつく前と一切、変わらない。田舎家の主人は、まだ黄梁を炊き上げていない。

「ああ、夢か」と彼は老人に言う。

「人生とはこんなものだ」と老人は笑う。

「よくわかりました。欲を出さずに私の人生を歩みます」と彼は、老人に礼を言い、去っていく。

別名、邯鄲の夢ともいわれる話だ。

人生というのは、黄梁が炊き上がらないほど短い間の夢のごとく儂いものだ。どんな富貴も虚しいものだと言っているのだろう。

それは事実であることは間違いない。富貴、榮耀榮華、何もかも、いずれ訪れる死の前には、虚しく、形などないものだ。答えはわかっている。

しかし、つかの間の夢であっても、なにかしらの人物になりたいくて人は努力し、戦うのだ。

私も同じだ。福澤桃介は、何者かになりたい。そう思って足掻いてきた。

ところがその何者かの正体を見ることができぬ間に病に倒れ、生ける屍と化してしまう。

私は、邯鄲の青年のように人生を悟ることはできない。まだ黄梁一炊の夢さえ見ていないのだから。

私が転地療養の地に選んだ大磯は、海と山に囲まれた療養には最適などころである。

私はある旅館の離れを借りて過ごしていた。誰とも会わず、海岸をぶらぶらと散歩する毎日である。

結核は、空気で感染する。ふさや大事な我が子を病の供連れにするわけにはいかない。見舞いなどに来るなど言い聞かせたので、訪ねてくる人はいない。

北海道炭礦鉄道東京支社の方は、私抜きでなんとか切り回しているようだ。あれほど頑張ったのにと悔しさ半分、腹立たしさ半分である。

やはり勤め人はよくない。所詮、大きな組織の歯車だ。私がいなくても代わりがなんとかする。男子の一生を歯車で終わっていいのかとの思いが強くなる。

何を言っているのだと、それに反論する声が聞こえる。結核という病になるなんて歯車が壊れたも同然だ。壊れた歯車など必要ない。取り換えられても文句を言うな。

こうして病を得て、死を意識すればするほど、短い人生をもっと愉快に生きることができないかと考えるようになった。

そのためには、もし、健康を回復したとしても勤め人は戻らず独立して事業をしたいという思いが強くなる。

しかし独立するにしても何から始めていいのか分からない。やはり勤め人の方が生活が安定するのではないか。

当面は、私の境遇に福澤先生もふさも、その他の友人たちも同情してくれるだろう。

しかし、その同情に甘え続けていれば、いずれ軽蔑けいべつの対象になってしまう。ふさだって、愛想をつかし、離婚を言い出すかもしれない。

いったいどうすればいいのか。苦悩する日々が続く。

海岸沿いの松林の中を散歩しながら、これからの人生について思いを巡らす。不安ばかりだ。

私が詩人であれば、こんな境遇でも楽しいだろう。

書を読み、自然の海や山を愛めで、清らかな空気を吸い、川のせせらぎ、鳥の声を聞き、夜には月明りの下で眠る……。

人生に不幸なことなどない。視点を変えれば楽しいことばかりだ。

しかし、私は詩人ではない。俗物である。立身し、富貴になりたいたの生来の野心も胸たきに滾たぎっている。このまま病を得た詩人のような暮らしに甘んじたくはない。

私は、何が何でも金を稼がなければならぬのだ。金さえあれば
どうにかなる。

病を癒すために転地療養をしている身で、金を増やすためにはど
うしたらいいだろうか。

私は、美しい自然の中を歩きながら金を増やす方法ばかり考えて
いた。まさに俗物の極みである。夏の蝉の声などが、カネカネカネ
と聞こえるほどだった。

なんとかしなければ……。そればかり考え、悶々としていた。だ
が、なかなかいい方法を思いつくことはできなかった。

ところで私は、元来臆病で慎重である。見かけは、大胆で恐れを
知らないように振舞っているが、その実は、そうでもない。

それは幼い頃の貧しさに由来しているのだろう。日ごろから、い
くばくかの金の手持ちがないと不安になるのだ。生まれた時から富
裕な人間にはわからない心情だろう。

そのためだ。私は日ごろから貯蓄を心掛けていた。

かの安田善次郎翁も貯蓄を勧めている。彼が日本一の大金持ちと
言われるようになったのは、貯蓄に励んだからだ。

善次郎翁は「チリも積もれば山となる」「勤勉と儉約」を信条に
働き、その結果、財をなした。

財の元は貯蓄である。煙草を止め、贅沢を慎み、少額でもコツコ

ツと貯えてきた貯蓄が元になって成功を収めたのである。

翁は「利益の二割は貯蓄し、何があっても使うな」とまで言い切る。収入があればあったで贅沢をし、使い切るようでは成功者にならないというのだ。

私は翁の考えに賛同する者である。

ただし、これを実践するのはなかなか困難なことである。収入が増えれば、それに応じて生活ぶりも派手になる。一度、高みを見た生活を落とすのは並大抵のことではない。それで収入が減ったにもかかわらず、ついつい派手な生活を続け、やがて破綻はたんしてしまう。

私は、日ごろから儉約に務めていたが、ケチ臭いと思われるのではないので表向きは派手を装い、付き合ってもそこそこに振る舞っていたが、裏では儉約していたのだ。

当初、私は北海道炭礦鉄道から百円もの月給をもらっていた。破格の待遇だった。その後、会社の業績が振るわず八十円に下げられたこともあるが、無駄遣いはしなかった。

東京では福澤家の敷地内に暮らしていたということもあり、家賃は不要。それで生活費に毎月五十円か六十円程度を充当し、残りは貯蓄に回していた。

その結果、三千円もの貯蓄が手元に来た。銀座の中心地の地価が坪三百円ほどだったから、これを投資すれば十坪程度の地主にな

れる計算である。

たとえ高給取りであっても、数年でこれだけの貯蓄はなかなかできることではない。

貯蓄を誇るなんて、器の小さい男だと言われるだろう。誰も褒めてくれないかもしれない。このことはふさにさえ黙っていた。いわばへそくりである。へそくりが三千円にもなっていたのだ。

これだ。これしかない。私は、松林の中で、風の音を聞きながらあることを思い付き、決断した。

株を利用して金を作るのだ。株式投資である。

株式市場は活況を呈していた。

朝鮮を巡って我が国と清国しんごくが戦争を始めるかもしれないという。

戦争は悲劇であるが、多くの軍事物資が必要となるため、その関連企業の株が買われていたのだ。

明治の世になり、我が国の経済は順調に拡大していた。国力も充実し始めていたが、隣国の朝鮮はいまだに李氏王朝りの封建制の下、庶民は厳しい暮らしを強いられていた。

首都漢城かんじょうであっても土壁のあばら家が続ぎ、汚物を溜め、どろどろとぬめり、流れることもない溝から放たれる悪臭。その中を日がな一日、仕事もせずにごらごらと歩く若者。まともな売るものがないのに道行く人に押し売りをする商売人。

庶民の貧しさを顧みることなく、官僚たちは首都に豪邸を建て、自らの地方の任地は部下任せで、ただただ税をむしり取るばかりで、まともな仕事もせずに贅沢三昧な暮らしをしていた。

一方、日本は、古くから朝鮮と交易し、交流を持っていた。

朝鮮の背後には強大な清国が控えており、国防の観点からも朝鮮は重要だった。そこで釜山プサンを中心に日本人街を作り、多くの日本人が住んだ。ここだけは別世界のように整然とした暮らしが営まれ、日本との人と物の流れが活発だった。

やがて、あまりの官僚たちの腐敗に耐え切れなくなった庶民や農民たちは各地で反乱を起こした。

その中から東学党とうがくとうという反政府組織が結成され、武装蜂起ぼうきしたのである。

彼らの主張は「朝鮮の官僚は私利私欲のために民衆を苦しめ、勝手な振る舞いをしている。彼らは自分たちの私腹を肥やすことにしか関心がない。彼らは傲慢で虚栄心が強く姦通かんつうに耽り、貪欲どんよくである。こんな状況を改革しなければならない」というものだった。至極真つ当なものだ。

東学党に追い詰められた朝鮮李氏王朝は、清国に派兵を要請した。清国はそれに応え、出兵した。これは一大事と、日本も清国に對抗し、朝鮮出兵を決定した。名目は、在国自国民の安全を確保す

るということだった。朝鮮の利権を巡り、日本と清国の対立の構図が明確となったのである。

日本国内では、日本と清国の戦争は必至であると、経済に活力が満ちてきた。軍が必要な物資を調達するため、梅干し、つくだ煮、漬物なども値上がりしたのだ。

多くの物資が動く。それらを運ぶための鉄道が必要になる。政府は鉄道整備を急ぎ、山陽鉄道の兵庫―広島間が開通した。鉄道局は戦争に備え、臨時鉄道輸送の整備を図った。

北海道炭礦鉄道に勤務していたお陰で、私は鉄道には一家言ある。そこで兜町の株式仲買人、山県安兵衛に頼み、鉄道株を買った。

素人はまず、買いから始めねばならない。売りから始めるのは、株が博打であるとの印象を強めるだけだからだ。

ふさは勿論のこと、福澤先生も株は博打であると思っている。絶対に手を出さない。だから二人には私が株を始めようとしていることは、秘密にしておかねばならない。

株は世間では鉄火場と称され、それを生業にする者は、相場師と言われ、尊敬されていない。一夜で大金持ちの成金になることもあれば、一夜で全財産を失い乞食になる者もいるという世界だ。

病人として療養中の私が、そんな世界に飛び込んだとふさが知れ

ば、それこそふさが寝込んでしまうだろう。

福澤先生は、塾の卒業生が新会社を起業したいと相談に来た場合、資金を提供し、株をいくらか持たれることがある。しかしこれは、相場ではなく純粋な支援だ。

私の場合は、違う。切った張ったの株の世界に飛び込むというのだ。

しかし、私は臆病で慎重である。もつと言えば、小心だと言ってもいい。だから株にのめり込んで全財産を失うような馬鹿な真似はしないという自信はある。

株を始めるにあたって自分なりに取り決めた。それは資金三千円の内、千円を限度に株式投資することにしたのだ。それ以上に損失が膨らむようであれば、すっぱりと株の世界から足を洗うつもりだ。

清国との戦争が始まる気配が濃厚になると、軍事関連の物資などの何もかもが値上がりをした。当然、それに関連した株も同じだ。誰が買っても上手く行くような株式市場となつたのだ。

そうは言うものの、全く会社や株について勉強もせず、ただ闇雲に投資したわけではない。

どのような会社が有望であるか、会社が成長するにはどのような経営者が必要なのか、必死で勉強、研究したのである。

生活費と療養費を自ら稼いださねばならないから当然のことでもあった。塾生の時よりも勉強しただろう。

こうして、私は株式相場に身を投じたのである。

株価は上がり続け、私は、細かく売り買いをし、利ザヤを稼いだ。面白いほど儲かる。病に倒れ、満足に働くこともできない身にとって株こそが財を築く方法である。私は儲けが増え、通帳の残高が大きくなっていくのを喜びをもって眺めていた。

株式投資を始めて数カ月が経ったころだっただろうか、突然、私の療養先に福澤先生が訪ねて来られた。

私は、慌てて部屋から株式投資関係の本を片付けた。

「どうですか？ 具合は？」

福澤先生は穏やかな笑みを浮かべて聞いた。

「はあ、大分、良くなりました」

私は、無事に本を押し入れに隠し終えて安堵した。

「せっかくだから松林を歩きましょうか？ 大丈夫ですか」

「大丈夫です」

私は福澤先生と共に海岸の松林を散策した。夜は、晩餐の席にも呼ばれ、ご馳走を頂いた。

福澤先生と別れ、療養先の旅館の離れに戻ると、不思議なことに疲れていなかった。福澤先生と過ごす時間が心地よかったためかも

しれないが、着実に回復に向かっているのだろう。

一人になり、押し入れに隠した株式投資関係の本のことを思った。株をやっていることはふさにも福澤先生にも秘密にしている。こんなことでいいのだろうか。福澤先生は、独立自尊の精神で、事業を興せとおっしゃる。私は、株を動かして、儲けているだけだ。先生から見れば虚業だ。

体も回復している。そろそろ株を手じまいして、実業に戻る時期なのだろう。

私は、思い切って大阪、東京の株仲買人に電報を打ち、全ての株を売却することにした。

仲買人は、私がどうかしてしまったのかと驚いたようだが、偶然にも一番高値で売却できたのである。なんと約十万円もの儲けになったのだ。銀座の土地を約三百四十坪も購入できる金額だ。仲買人は驚き、私のことを天才相場師などと持ち上げた。

千円の投資が、たった数カ月で約十万円にもなったのだ。

私についている。持っている男なのだ。

4

なかなか秘密は守れないものである。約十万円も儲けた私の噂

は、友人を通じてふさに伝わった。

友人は、私が株式相場に手を出していると話したようだ。そしてそれは丁半博打と同じで、また瞬く間にひと財産をすってしまおうなどと吹き込んだらしい。丁半博打と聞いてもふさはそんなもの知る由もないが、ただただ恐ろしいものに我が夫が手を染めていると恐怖心を強く抱いたのだ。

ふさが療養先に駆け付けてきた。その表情は、怒り、悲しみ、きょうがく驚愕、恐怖に満ち、複雑だった。泣いているのか、怒っているのか、とにかく尋常一様ではなかったのは確かである。ふさは、全身を震わせ、絞り出すように「桃さん、あなた株をやっておられるのですか?」と聞いた。きつい声だ。いつもおっとりとした穏やかな口調で話すふさが、まるで別人のように問い詰めて来る。

ここで嘘をついても仕方がない。ふさがかえって不安になるだけだ。その不安を福澤先生に持ち込まれて、養子縁組解消などというとんでもない方向に発展しないとも限らない。

「ああ、やっているよ」

私は、やや投げやりに答えた。

「今すぐ、お止めください」

ふさは、さらに強く、厳しく言い放った。

「もう株は全て売却してしまった。手元には一株もない。止めるつ

もりだが、なぜそんなにも怒っているのかね」

「お止めになると伺い、安心いたしました。なぜ怒っているのかおわかりにならないのですか？」

「ああ、わからないね」

私は多少むきになっていた。

「株は危険なものです。博打だと聞きました。財産を無くしてしま
います」

ふさは、友人の名前を挙げた。

「たしかに株式投資は、一夜にして大金持ちになったり、破産した
りする難しいところもある」

「そうでしょう？ 危険なのです。失敗すれば福澤家にも影響があ
ります」

ふさは、私のことよりも福澤家の財産を心配しているのか。すこ
し失望した。

「しかし、病気療養中で満足に働くことができない私に、株以外で
稼ぐ方法があったら教えてほしいものだ。お前に余計なことを吹き
込んだ、その友人とやらからもね」

「何をおっしゃるのですか。お金のことなどご心配せずに療養して
いただければいいのです」

ふさは悲し気な顔をした。

「それはありがたいことだけれども、男子たるもの自分の家族を自分の金で養えないなんて恥だと思っている。だからどうしても自分で稼ぎたい」

「それは、お体が元のようにご健康になられてからでよろしいでしょう。何も株のような危ない、正体不明のものに手を染めなくても……。それも私に一言もおっしゃらずに……」

ふさは、興奮したのか、目に涙を溜めている。

女ばかりではないが、どうして自分に何も言わなかったのかと憤慨する人間がいる。知らされるべきだと思っていることを知らされなかったことに怒りを覚えるのだ。しかし人は、なんでもかんでも自分の考えを人に話してから行動することはない。行動した後で、その事実を知って、それでもその人を信じるかどうかだ。むしろ何も知らされなかったことに、相手の深い愛情を知るべきだろう。余計な心配、気遣いをさせたくないという思いから、人はなにも言わないのだ。

かの赤穂浪士のリーダーである大石内蔵助も、妻にさえ討ち入りを話さなかったではないか。

私がふさに株式投資のことを話さなかったのも愛情からだ。成功も失敗も、賢明さも愚かさも全てをそのまま受け入れてこそ本当の夫婦というものであろう。

「ふさ、お前は、株について相当の誤解をしている。確かに株式投資は危ない面はある。しかし博打とは違う。そんなに危険なものならどうして政府が奨励するのかね。株はね、我が国の国力を高めるための重要なものなのだよ。事業は、株式会社でなくても興すことはできる。しかし事業の盛衰せいすいと株の上下とは、非常に深い関係があるんだ。株が暴落すれば、株式投資をしている連中が大損するだけなのか。そうじゃないんだ。株が暴落すれば、事業が衰退するんだ。事業が先か、株が先かと問われれば、事業が先なのさ。事業が盛んになれば、株価も上がるんだよ。私が学んだアメリカを見たまえ。アメリカ人は、株を博打などと考えない。事業が盛んなのは株が盛んに売買されるからだよ。事業が盛んになれば株式市場も活況を呈する。それがまた事業を盛んにするんだ。我が国も、アメリカに伍こして立派りつぱになろう、発展しようとするばもつと株式投資を盛んにしなければならぬ」

私は株式投資に関する持論を一気にまくし立てた。ふさは涙目ながら気が抜けたような表情で私を見つめていた。

「桃さんのご高説はよくわかりました。しかし私の心の安寧あんねいをお考えになつていただけなら、金輪際、株には手を出さないでいただきたいのです。ところでいくら損をされたのですか？」

ふさは険しい表情に戻り、聞いた。

さあ、来たぞ。この質問が。私は、目に笑みをたたえ、どのように答えるべきか思案した。

「損をしたと思っているのか？」

「そうでしょうか？ 誰もが株では損をしていると聞いていますか

？」

「これを見たまえ」

私は、通帳をふさに見せた。

ふさは、不審そうな表情で通帳を開いた。その途端にのけぞるかのように驚き、私と通帳を何度も見比べた。

「う、嘘でしょう。これ！」

ふさの目が飛び出るほどに驚いている。「十万四千元！」

「凄いだろう。これが私が株で稼いだ金だ。ふさ、褒めてくれ」

私は、得意そうに口角を引き上げ、笑みを作った。ふさが、驚きの後は、私を尊敬の目で見てくれると思った。

一万円でも、家族五、六人が生涯にわたって悠々と暮らせるだけの財産である。それが十倍もあるのだ。ふさにも子供たちにもなんら苦勞をかけることがない財産である。

ふさが、通帳をベッドに放り投げた。まるで不浄であるかのような扱いだ。

「何をするんだ」

私は、ベッドの上の通帳を掴み、それで額を何度も叩き、心の怒りを抑えながらも顔は努めて笑うようにした。

「株で、儲けたお金など……」

ふさは、わざとらしくおどける私を何か恐ろしいものでも見るような目で見ている。

「ふさ、病床でまともに動けない私が、たった千円で、普通の人が一生かかっても稼ぐことが出来ない金を稼いだんだよ。この頭でね。少しくらい褒めてくれてもいいだろう。私は、私なりに株を研究して、そして全て手じまいしたんだ。それがこの結果だ。たった数カ月で作った財産だよ。ふさにも子供たちにも苦労はさせない。私は自分の金で、家族を養うことができるんだよ」

「でも……」

「でも、なんなのだ。ふさは、福澤先生の庇護の下で、金の苦労なんかしたことはないだろう。だけど私は違う。幼い頃から、苦労をした。だから金持ちになって世の中の連中を見返したいと思ったものさ。こんな気持ちはふさには理解できないだろう」

私は、興奮したのか、話が止まらない。

「金が無ければ、夫として、父親としてのプライドを保てないだろうね。いつまでも福澤先生に甘えているわけにはいかないんだ」

ふさは、観念したかのようにうつむき、「よくわかりました。こ

れだけのお金があれば十分です。金輪際、株には手を出さないと誓ってくださいますか」と絞り出すように言った。

「わかった。ふさに忠告されなくても、全て手じまいして、株式投資は卒業だ。深入りしていいことはない。こうしてひと財産ができたことを僥倖きようこうとしなければね。元の木阿弥もくあみになりたくないから。もう心配をかけないよ」

不安そうな目で私を見つめるふさの肩を、優しく抱いた。

しかし私も人の子である。こんなに簡単に金儲けができるなら、もっと儲けられるのではないかと錯覚してしまった。十万円も稼ぐことができたのが自分の実力と勘違いしたのである。単に運が良かっただけだと謙虚な考えにならなかった。

この辺りが、私の軽薄、いい加減さであろう。ふさには、株式投資をすつぱり止めると約束したのだが、それを反故ほんごにしてしまったのだ。なにせ株価が引き続き上昇していたからだ。

ふさは、株を博打のように思っていたが、私は、それを間違いだと強く言った。日本の国力を高めるために必要なのだと。しかし、上昇を続ける株価を眺めていて、うずうずと心が騒ぎ、今、止めなくとも、もう少しやってもいいだろうという心境おちいに陥った。

株式投資は博打打ちではないと言いながら、これは博打うちの心

境である。博打は、勝っていても負けていても止め時が難しい。勝っている、もっと勝ちたい、勝てると思う。負けていると、もう少しやれば勝ち運の波が自分に向いてくると思ってしまうのだ。

私は、時流を完全に読み違えてしまった。それは欲のために目が曇ったのだ。

清国との戦争が明治二十八年（一八九五）四月に終わり、戦争景気もこれまでと違っていた。ところが我が国は清国から二億両もの賠償金を受け取ることになったため、国内は、勝った、勝ったの大騒ぎ。なにせ明治維新以来、緊張関係にあった大国である清国を屈服させたのである。国民は熱狂し、戦勝気分が横溢し、景気がさらに過熱していったのだ。人々は新しい着物を新調し、贅沢に着飾り、次々と新規開店する銀座の洋食屋に足を運び、飲み、食い、笑い、歌った。当然、株価の上昇の勢いも留まることはなかった。

「桃介さん、株、止めちまったんですか。そりゃあ、もったいない。今こそ、稼ぎ時ですよ」

「株式投資の天才が、今、出て行かないで、いつ出て行くんですか」

株の仲買人が頻繁ひんぱんに声をかけて来る。株式投資の天才、神様などと彼らのヨイショが耳に心地よい。私の心に棲み着いている投資の虫が、騒ぎ出す。徐々に、彼らの言葉に乗せられ、自分の実力を過

信じ、慢心し始めた。これは自分では気づかないものだ。いったい誰が、今、自分は過信、慢心していると反省するだろうか。

孔子の高弟である曾子そうしでさえ「吾日われに吾が身を三省す」と言い、一日の終わりに三度、反省しなければ過信、慢心に陥るのである。凡人である私が、その心境になるのは防ぎようがないではないか。

「あの相場師が二百万円も稼ぎましたよ。三菱が九州鉄道の株を三万株売りに出したのを、買いに回ったんです。三菱が売れば、買い。これが儲けの鉄板だって皆が騒いでます」

ある有名な相場師が、三菱の売りに対抗して買い上げ、大儲けしたのだ。それで三菱の売りを買い上げれば、彼のように勝てるという噂が電光石火くわんせつの如く兜町に駆け巡った。

「三菱が売りを出したら、教えてくれ」

私もその噂を信じてしまった。自分の頭で熟考せず、根拠のない噂に乗せられ、自分ならもつとうまくやれるのにと思う過信、慢心からくる目の曇りに気づかない。嗚呼ああ、なんと愚かな人間であることよ。

ついに三菱が九州鉄道に続いて山陽鉄道の株を売りに出した。

すわ、買いだと兜町は大騒ぎだ。私も、仲買人に「買え、買え」

と命じ、山陽鉄道株を大量に買った。

ところが株は下落を続けた。ついに明治二十九年（一八九六）の秋には大暴落となってしまった。政治の不安定さ、戦費過大からくる予算の引き締めなどが原因だ。

戦争中は、内閣と議会は一致協力し、過大ともいえる予算を通過させた。ところが戦争が終わると、そうはいかない。議会は、内閣が提示する予算に反対する。清国から巨額の賠償金をせしめたとはいえ、財政の健全化を目指さねばならないというのが議会の総意であった。予算通過が困難と見た伊藤博文は総理大臣の座から降り、新たに松方正義まつかたまさよしが内閣を組織した。彼は、西南戦争後のインフレーションを抑え込むための、松方財政ともいわれるデフレーション政策で名高い。松方は総理大臣と大蔵大臣を兼務した。そのため世の中にデフレーション不景気との印象を与えたのだろう。

株価は正直である。どんどん下落の勢いを増していく。それでも愚かな私は、きっと株は上がると信じていた。もう少し待てば、上がるだろう。もう少し、もう少し……。私の頭の中には上昇する株価しか想像できない。まさに博打の鉄火場にいる気分だった。頭の中はカッカと火が燃え盛り、目は血走り、冷静な判断が失われてしまった。

それでもやつと目が覚めた。これでは全てを無くしてしまうという恐怖心が芽生えた。要するに株価の上昇に自信を持てなくなった

のである。私は、思い切って全ての株を売却した。損切りを実行したのだ。その結果、今まで稼いだ十万円が半分になってしまった。だが、半分でも残ったことに満足しなければならぬと思いついた。この失敗のことは、ふさには口が裂けても言わないようにしようと思つた。

5

短期間に株式投資の成功と失敗を味わってしまったが、株式投資は決して悪いものではない。

私は、株式投資について三つの原則を考えた。

一つ目は預金利子を基準とすること。それを守って売買することだ。この基準を外れて株価がどれだけ上がるうとも、それにつられてはいけない。

少し詳しく説明すると、株には配当がある。例えば一割二分の配当がつく株があるでしょう。五十円の払込に六円の配当である。この株が百二十円以上になれば配当利子は五朱（%）以下になる。その場合は売る。株が六十五円以下になったら配当利子は七朱（%）以上になるから買う。

なぜ五朱と七朱なのかと言えば、定期預金の利子は大体において

五朱と七朱の間を行き来しているからである。

株は、預金金利や貸付金利など市中に金利に大きな影響を受けるものなのだ。

しかしこの基準はあくまで私の原則である。なぜこれを決めるかと言えば、売り時、買い時を間違えないためだ。もう少し待てばもつと上がるかもしれない。そうならば売ろう、と思っているうちに売る機会を失う。もう少し待てばもつと下がるかもしれない、そうならば買おう、などと逡巡していると買う機会を失うからだ。

二つ目は、安全な、健全な経営の会社の株を選ぶこと。十分に会社を研究して、その株を買わねばならない。経営内容もわからないが、株が上がっているからと買うのは愚の骨頂である。

三つ目は、借金までして株を買わないことだ。株価が上がっている時、銀行は株購入資金を喜んで貸してくれるだろう。しかし株価が上がっている時はまだしも、借金の額を超えて株価が下がり始めたら、焦ってもう少し待ってれば株が上がり、借金を返済できると思ひ込んでしまうものだ。こうなるとお終いである。何人もの相場師が、結局、売り時を失い、借金を返済できず、破綻したことがあるか。

資金が少なければ、少ないなりに自分の給料の中から都合をつけて株を買えばいいのである。ゆめゆめ借金までして株を買わないよ

うに。

株式投資で成功するには、運がいいだけでは駄目である。より思慮深くなければならぬのだ。

〈つづく〉